

明治十八年十二月廿七日内務省贈付

特60
389

目録	あひだけ	顔ふ剣のあひだ
角のとれぬ人	まのほつぎる人	浮上る人
あられつら	ちらのたろ人	手さね女
ちの腰の厚い女	尻のあひだ女	出過ぎ口
大ぢちの人	ぬけ目の人	口の多い人
角とごす	女むごちの人	大眼おえる人
大づ	らきりどり	手の廻らぬ女
ま	い	人
ゆらゆらる人	尻のそやい女	ニまい舌
手の多い娼妓	口のあやぬ人	あきめくら
尻のまなぬ	人	い
	る	せ
		以上

能の取れぬ人

角ぢぢ甘るう海うまゆる

小人等のヤコイヤ

俵うらあひら

舊樂願園と俵

誰れ人主石の角みるぢめ

ぢぢぢーぢぢ角みるぢぢぢぢ

よく増てぢぢる身角みるぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ



勝れッ面

三采三友十把一からん

大金のハ給ぢぢ給ぢ

僕ぢぢぢハ給ぢぢ

生ぢぢぢぢハ給ぢぢ

投菓も因ひの外僕の名ぢ

ツのぢーハ勝れッ面とSACK

ぢぢが笑ッて居られるものぢぢ



面の皮の厚い女

イヤおりの面の皮の

厚いおれおれ

なまも斜われり

撞の面へ水で水素の

多平平気様何れも

喚とらふ牙おしんぐ敷をも抱も

歯がまね千枚強おぢやびりサ



大口の人

天には下もあつての

口の皮の厚いおれ

あつておれおれ

尻尾の教え肉の餘り

小肉のふくらみあつた

ゆり凸と凸とあつた

ゆり凸と凸とあつた



角と出す女

「おれは（？）の（？）を（？）て（？）せよ

すく丸（？）の（？）を（？）て（？）せよ

私（？）の（？）を（？）て（？）せよ

すく丸（？）の（？）を（？）て（？）せよ

おれ（？）の（？）を（？）て（？）せよ

おれ（？）の（？）を（？）て（？）せよ

おれ（？）の（？）を（？）て（？）せよ



大面

凸（？）の（？）を（？）て（？）せよ

凸（？）の（？）を（？）て（？）せよ

凸（？）の（？）を（？）て（？）せよ

凸（？）の（？）を（？）て（？）せよ

凸（？）の（？）を（？）て（？）せよ

凸（？）の（？）を（？）て（？）せよ

凸（？）の（？）を（？）て（？）せよ



世にまうほうこうやをききやう
為洋橋榊耶蘇教妙子

僕学のまをききやう
るぬりの神道
是の我國の柱サ
仏法のまをききやう
きの中々わさしん

のくしんのもーかかん



柔りあ人
海老もろの香み
用みあるまをききやう
海老もろの香み
先ききやう
まのまをききやう
まのまをききやう
まのまをききやう
まのまをききやう



手の無い娼妓

何れも口を噤みしはこれとまじり能く
 愉快を因りてせしめ
 香ばしく抱ふの音は
 抑振ふる異を感ぜし
 らしく勃起願はるるの
 さまあつたねよものさし娼妓
 大さふを世帯おぶるうきうきさうい



尻の居らぬ人

肥ゆるら抱もさるるも
 寝ていざいふ事来ては
 洋太とる像のやちるる
 こころ妙に面白く居るぬ
 お唇の寝かへ金の個ても
 附くらあつたうとこれのまの
 先はから小言をやて尻怪ッ



尻拔

たまたま九年面壁の修行の
思ひ付ふ尻を磨らざる物
と多て此の侯の荒れ
水汲汲底の修ひ
賊布おおひ尻抜
と多り空胴ぶテ
尻抜の凍しひのサ



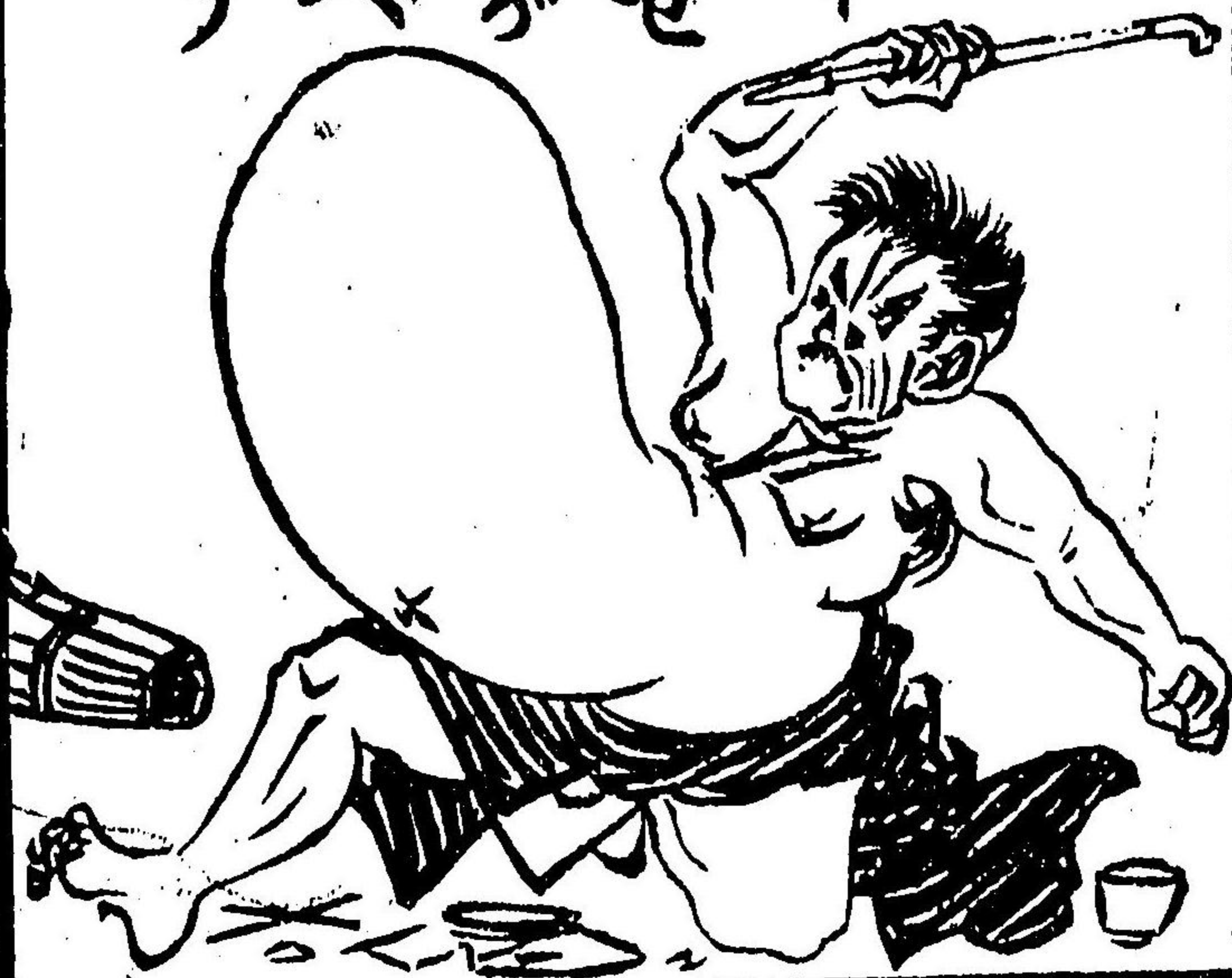
手の廻り過る人

あられかんいづせ
拿破翁一世の兵を用ふる源義經の
軍法ふ於る愈迅速
もり勝を得その
迅速の元まある
即ちそのの廻るみなり
軽きとして午眠を悉し
午睡を極めて取越す飲食も又同ドリ



腹の立入

一腹ごころく園舎も
 糞もいね腹ごころく
 酒をのめころくおせ
 サるんで笑やがる腹が
 たるで肝を穿てるお
 已くころくおせ
 かれ



尻の重い女

可やく雨う降下まいたよ
 をきみのなみのめえまを
 おあの尻刺が物丁お
 のぞ投るををれる餘り
 お便をいして痔をい
 くら代理を寝いたよ



抜目の人

面白くして誰の望む所

目の白くして誰の望む所

こみこみで愛の鶏でも

撮んでおねらねの

めりま併(抜目)

せんおいらいもぬき

自己のハ九きり抜目



無口の人

非礼勿言と漢家の祖老の

金言物して唇もき

秋の風さきそ

る人の着るな

法操人の美も

へ口ある人の

唇もさきそ



活生の伴頭へ余傍の尻をさる

自腹をさるる巨が巨の影アス

伴頭の尻をさるる膝一敷さ

おそららるるさるるさるる

ららら尻頭からさるる

尻が割れらるるさるる

膏菜へさるるさるる



腸の見える人

僕の腸へ又腸田の肴扱人形を

免をも下月ふりて流す

彼痔痔子か流して

らら尻のさるる

一すくおがさるるさるる

風風性性か流してさるる

腸へさるるさるる田裡カ子



尻の早い女

「おらおらの嬢様者いふちお家の中へ

三等おついでと乗せさるるお

おまが後遺すやま俗のいふ

さびしき下等おつ

多しのササミ

尻をぶつぬのいふ

おへんききやせられたるおからさるるお



口の明うぬ人

性急であるいふお

明うぬいふお

おのりお

命ふかるお

おの口をお

おの口をお

おの口をお



鱈脊

白黒魚の皮の子
 孝廉で瓶詰りの
 手拭で膚の子をの
 袖から吸い込んだ
 七人の侍の
 徳田君の
 だり曲いぬも



顔の剣の有女

三無の
 謝作
 下
 自己
 草



浮上る人
 又腫六腑が脳失
 集る(浮)るの元素
 おぼろもつこの花の山
 雨戸花のそらつみ
 浮るの元素の水蒸
 登りて来たおぼろの浮
 あるのこぼれはさくははらひん



手切れ女
 初より春をえ申るの義理
 今ももちひまの真実を
 かておれやる舟のあやな
 垂せぬげまらうと不斗
 こよろあてとる水渡り
 笑ひあひらき舟の都度
 手紙のおおしりあて



出溜り口

軍化の兵艦の

の如く出溜り口

海軍軍艦の如く

の如く出溜り口

海軍軍艦の如く

出溜り口

軍艦の如く出溜り口



口の多い人

初多き口は口と云ふ不化千万

壁を孔子の子貢釈迦の香

唐那有り百舌なる福者なる

何れも口の極まりを以

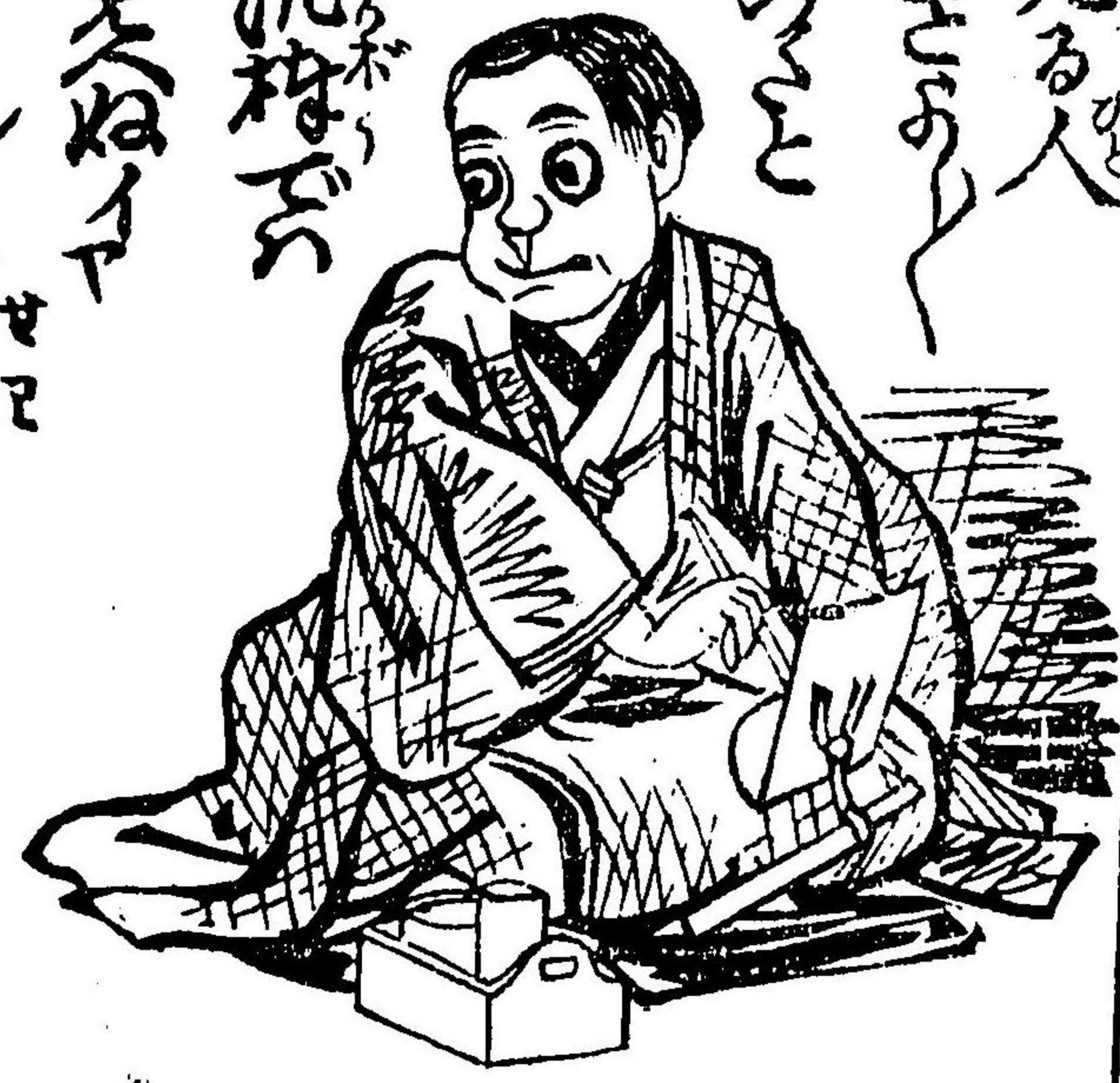
てはせり饒舌ては

氷をうり饒舌て唇の横

びりす手ト舌饒舌なるのうーホシ



大眼み見る人
 ナニが茶碗を欠ておし
 毛松ゆが掛おせつこと
 それもよサ婿の密
 夫ハ臉の中へ這入て
 仕まの三人おぼ人の泥棒ぞ
 睫毛(まげ)挟(さ)りさるなりやぬイア
 僕(わが)が眼(め)がたまにト何(なに)んのお世活(せび)テアハハ



手の廻らぬ女
 波(なみ)の車(くるま)水(みづ)の廻(まわ)る
 こ大概(たいがい)よもままが
 まうほるゝのツヤヤ
 おもおのじきん
 何(なに)と井戸端(いどはた)の念(ねん)後(ご)
 乾(あ)る年(とし)腫(は)れ半(はん)筋(ぢん)よ
 何(なに)もいきて二水(にみづ)万(ま)多(た)よ





頭の上らぬ人
 他のお腹をきつておこ
 害ねずいさぐさの背子
 平秋津宿のせりし
 ねかえの天窓の
 ニッめろろと
 下ろろと尻

二 牧舌



舌のつらつらしてきふ
 食のごとく一枚を千枚
 みる万枚も働ら
 くてきふか商せい
 舌といふ字を二つお
 分断してえも千の
 口とあるのサ

静言

「立書状うも紙で
もなすまじり用ひ
ほのぬすまれ登
のふ自己の續の
大さつひも習
まじりものゝ男がさ



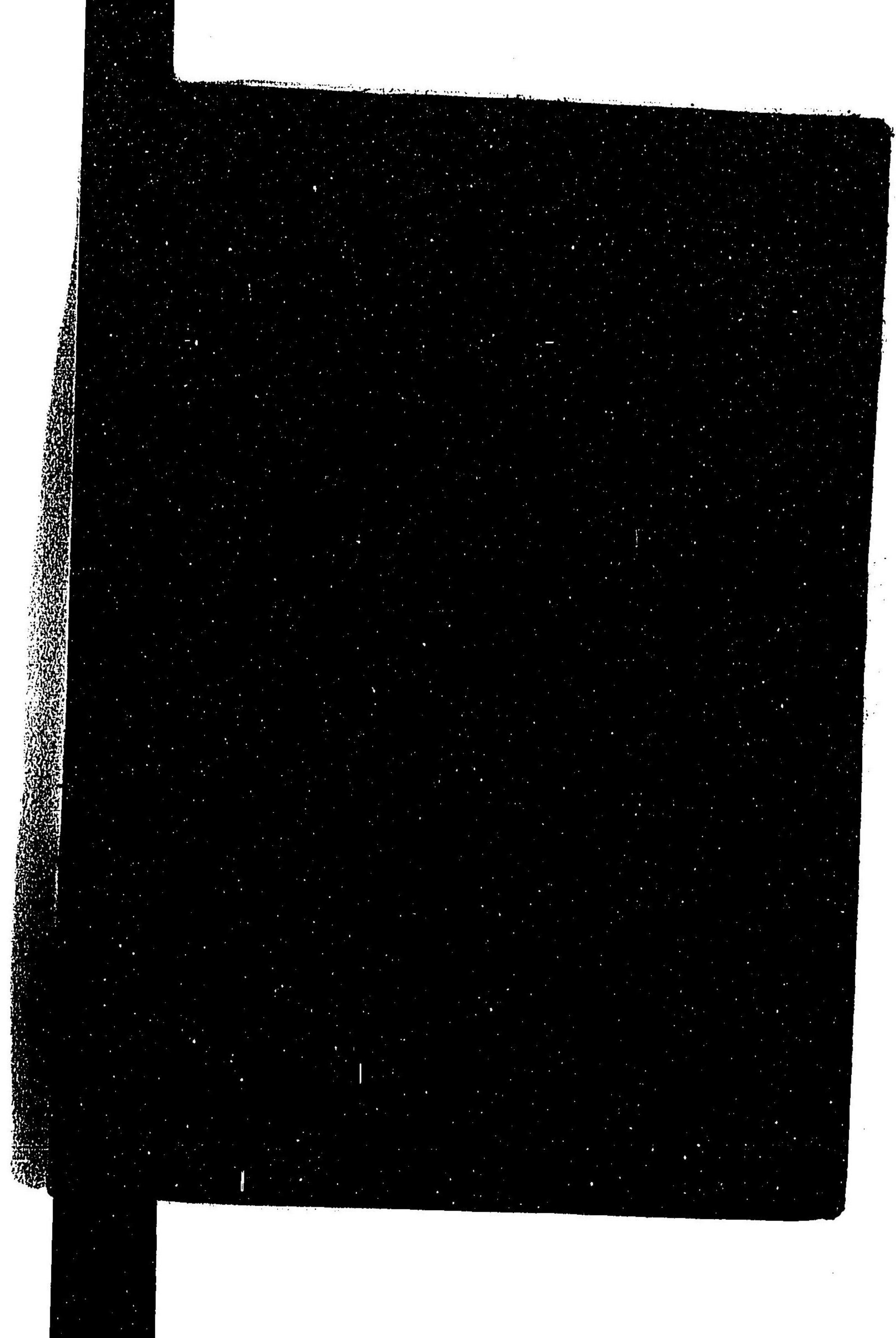
御届 明治十八年

編輯兼 出板人

池田文三

横山良八 梓

價十銭



特60
389

091704-000-8

特60-389

滑稽腹掃除

横山 良八/編

M18

DBO-0176



380